

宮比神御傳記

全

昭和二年一月一日  
通賢縣立圖書館中學校  
第八二八之部  
第八二八之部

谷 堀 林  
全頁八頁  
土封出巻  
外磁平註

1363

1



宮比神御傳記序

源比石川篤記歟しは毛。我が父の幼るに教  
子形家。道小志ふく。言よまはま。其行いを  
先小変る人。父法講説を記く。手筆哉  
を。説示さ。事字。まら。取人  
那里。故去の宮比神比御傳哉。二ふびで聞  
大のふ。綴王。此をい。板小。世  
傳牙。と乞。父見。然毛

穴津  
紙書  
辰藏

宮比神御傳記序

何れは。我るほ言加子くはし也。直ち小筆とて。  
更尔漏々る事ども。の記入きて與子給ふ。篤記  
ぬし悦びて。やぐそかく板牙彫しめて。於此まよ  
此よし一く。あま書てと云。あくみ。宮比神比御い  
はを志す。今更よ云べくも何ら孫は。唯まの也志  
よし。茲れみ記さる。好年。

文政十二年といふ年。五月。飛ぶ此鐵胤

宮比神御傳記

宮比神御傳記

平篤胤大人講説 門入 石川篤記 打聽

此御傳記ハ我師の宮比御神の奉公宮仕へ。女男女の  
人々を守り多ひ。歌舞ハ音曲こと。狂言綺語比類ハ。摠して  
諸人の愛敬。あし滑稽風流のわざ。壽命長延此事を  
守護しあふ本縁を。貴賤上下此人より弘く知志えん為小。

其わざ俗語小解と云き。其後子かき記し。書あり。

宮比神と申し奉るは。女神はおはし坐て。まこと此御名を天  
宇受賣命也。大宮能賣命とも申。此神の御由來故  
古事記。日本紀。古語拾遺。延喜式。あど始め。朝廷此正しき御

書物ども考ふる。此天地世界万物を始めぬ。皇産  
靈大神の御子。天太玉命と申す神の奇靈小妙なる故有り  
て。此宮比神を生みへり。

是ら此事とも委く知らむと思はむ人を上にしる古書  
少もふよまて見ゆし

丙々世人の普く聞傳へたる如く。伊勢内宮に御鎮座まし  
ま。天照大御神。高天原より甚く怒りあふ御事有りて天  
岩屋戸を丙して幽居りみい。は。天上天下去とく。と書  
夜の別ちなく常闇とあり。万の悪神妖鬼も時成  
得ずりと喧きあち。悪事しつ。起り出り。

神代卷。螢火あや光く神。五月蠅あや悪神とも。荒び  
起ると有るは。此時の事あり。

八百萬神とち憂ひあひきて。岩屋戸より大御神を出し奉ら  
る。は。此妖氣やほしと。様くは工夫みい。岩屋戸の前小庭  
火を焼き神樂を奏して。その音楽を怪おせ奉りて出御から  
せ奉らんと。神あち某く小音楽は役成つや。琴笛太鼓。  
つみ。笏拍子杖を。め。色くのあり物も。此時より起れる  
中。も。琴は弓六張を。管をとら。擗鳴せ。是謂由原  
倭琴の始め。須賀加篋といふ事本あり。古書小見えとめ。  
今世までも。琴曲。あかき。云ふ手の有るは。此由なる

事あり。惣して彈物のふぐいは。悉くそ此本を倭琴よ  
出さるが故。三味線は曲るも祝儀はあかきの手  
あると。世人も普ねく知れるが如し。然れと管搔と云ふ  
詞のわけを知ると人も形き物あり。此て笏拍子ハ謂ゆる  
拍子木は始免あり。

此神樂の時も。宮比神を。天香山の。日蔭は。蔓は。蔓  
を。真拵は。蔓を手襖のうけ。左は。御手小を。天香山の。笹葉を  
手草小由。右は。御手手は。鐵鐸の。鈴を付する。某ま。記は。予哉  
もち。かの。岩屋戸の。前に。宇氣槽を。伏せて。踏裏うし。拍子を  
取りて。神遊は。長をつとめあへり。

今世も。朝廷の。重き。御神事の。時。雲客と。ち。に。日蔭。蔓  
と云ふ。物を。冠。不。著。一。め。あ。こと。是。より。起。れ。り。ま。は。筭  
簪。など。凡。て。女。比。髪。小。か。ざ。り。を。為。る。あ。と。も。神。世。の。髪。よ。り  
起。れ。る。事。あり。諸。お。と。神。子。比。手。小。笹。葉。を。もち。て。祈。念。し。  
舞。小。鈴。を。持。こ。せ。神。前。に。鈴。を。掛。る。こと。も。此。時。より。始。れ。る。  
お。と。内。侍。所。の。御。神。樂。小。人。長。と。云。ふ。役。あり。て。進。退。の。事。を  
は。う。る。事。あり。即。ち。の。宮。比。神。は。神。遊。ひ。の。長。と。あり。ぬ  
ひ。し。より。起。れ。る。事。あり。

爰。八。百。万。神。と。ち。共。小。樂。器。を。合。せ。て。う。ち。囃。し。ぬ。ハ。宮。比  
神。い。と。も。妙。小。美。し。き。御。声。あり。て。ひ。と。あ。み。よ。い。つ。む。あ。り。

やまらぬはしり。百ちよろづ。と六言四句の歌を謡ひて舞  
あまの神懸とて憑物にせし如く。女神にちて得為まつ記  
胸乳をかき出し。内股さへ小頭はしみの裳の紐を陰の辺まで  
おし垂れ。わざと可笑しく物狂うく。舞をどるまひりま。  
神世の語不。女に陰所をほとく云へるは。合處をいふ言  
小て。股に間小合おれる処を依故の名あり。女おハ此上も  
あき大事の處おるを。其辺まで頭をして。ちどけ無く裳  
紐を垂れあへるは。実小洒落の極みと云あへし。今の凡人  
のみおらま。神世に神等も加ふる態おはうき。笑あそ  
真情ありり。然れを中世まても。神子にまは故実を傳へ

しと見えて。無住法師が砂石集といふ物不。和泉式部が。  
貴布祿社小。祈ごとありる事を云る。処小。年長くもみま。  
赤幣とて並へくる。周王を。様く小作法して。鼓をうち。前を  
うき上てあき。三返めぐりて。是躰不せさせあへといふ。小。  
和泉式部。面うち赤免て。千早振神の見依目も恥あーや。  
身を思ふとて身をや捨へき。と詠とる事あり。今に世に  
縫物を穿て。針抜失ひく。時ふ。それ女にそく不。信仰の  
神を念して。前の毛抜三返りき上げ。三返あけハ。失く  
針うぬらま出るを。出ある時に。前の毛を三返り靴下まと  
云あましあひも。此にちれ残れるあま。

やまらけはしり。もろちよろづ。と六言四句の歌を謡ひて舞  
あまの神懸とて憑物にせし如く。女神れもちて得為まつ記  
胸乳をかき出し。内股さへ小頭はしめる。裳の紐を陰の辺まで  
おし垂れ。わざと可笑しく物狂う。舞をどるまひりるま。  
神世の語不。女に陰所をほとく云へるは。合處をいふ言  
小て。股に間小合おれる処を依故の名あり。女小ハ此上も  
あき大事の處なるを。其辺まで頭をうて。志どけ無く裳  
紐を垂れあへるは。実小洒落の極みと云あへし。今の凡人  
のみ知らま。神世に神等も。かゝる態あはうりき笑あそ  
真情ありり。然れを中世まても。神子によれ故実を傳へ

しと見えて。無住法師が砂石集といふ物不。和泉式部が。  
貴布祿社小。祈ごとありる事を云る。処小。年長くもみ出。  
赤幣とて並へくる。周王を。様く小作法して鼓をうち。前を  
うき上てあき。三返めぐりて。是躰うせさせあへといふま。  
和泉式部。面うち赤をて。千早振神の見依目も恥ありや。  
身を思ふとて身をや捨へき。と詠とる事あり。今此世に  
縫物まき。針抜失い。する時小。それ女にそり。信仰の  
神を念して。前の毛抜三返りき上げ。三返あけ。失する  
針う知らま出るを。出ある時に。前の毛を三返り記下まと  
云あましあひも。此にちれ残れるま。

偕そ此御歌の末句も。ちよろづと宜へる。実ふは股乳  
宜しと綺語して。神とち或笑をせ。その笑ひは。大御神の怪み  
おして。岩屋戸を出ぬは。む事を思ひは。りてあり。是子八百  
万神とち。それ所作の面白さ。可笑さ。不堪う。ゆみひ。大きう  
ううれて。諸声。ありて。於受賣。於計。猿女。戯も。れよ。高天原の  
動く。ちう。聖小。賞め。笑ひ。る。ゆ。此。由緒。によ。ま。宮比神。此  
ま。此。御名。を。天宇。受賣。命。とは。申。せり。そ。は。此。の。如。き。天。切。の  
時。小。人。う。面。勝。ち。餘。此。神。と。ち。の。恥。て。え。ま。ま。じ。き。戯。己。ち。を  
為。さ。ま。い。し。故。あ。ま。

ゆ。あ。是。より。後。小。猿。田。彦。神。と。申。ま。いと。嚴。め。く。恐。ろ。し。此

有状ある神小向ひて。少うも畏ること無く問答して。其  
名を顯せしめる事も有り。是を以て神世の御書小。此神  
強悍猛固き故。於須賣と毛。宇受賣也。も申せり。世。強  
女。於。須。志。と。云。ふ。は。是。縁。あり。と。見。え。ら。ま。○。ち。て。於。計  
猿。と。は。猿。の。年。老。と。る。依。云。ふ。老。と。る。猿。は。よ。く。舞。を。ど。り。  
戯。妙。ぎ。を。能。ま。依。物。ある。故。宇。受。賣。命。を。それ。小。准。へ。八。百  
万。神。と。ち。も。志。や。れ。浮。き。て。右。の。如。く。な。め。あ。い。し。あり。此。由。小  
よ。り。て。宮。比。神。の。御。子。孫。此。女。を。猿。女。君。と。名。小。負。せ。て。此  
時。の。神。樂。も。聖。事。始。ま。れる。鎮。魂。祭。此。御。神。事。ま。ま。内。侍。所。の  
御。神。樂。ゆ。も。仕。へ。奉。る。事。依。が。今。至。る。ま。で。御。神。樂。此

嘲し詞了。阿知女於計。阿知女於計といふは。於須女撰と  
云ふ言ひて。此由りよる事なる。○儲志やれや云ふ詞を。  
むけ子俗語のおとく思ふ人多うれと。昔よりある詞にて。  
清少納言は冊子。ほく紫式部の物語あやを始め。古き物語  
歌書ともふ。ゆきをみ。され者。さき舞。さきつづぐり。戯歌  
あじ云ひ。或をさ麻がうのまし。ゆるがう態あどいふ詞の  
あるは。皆是より出ある詞あるゆゑて知べく。猿を云ふ名も。  
さる。物ある故の名なり。まゝ猿樂と云ふ名も是も至  
出たり。

實中も宮比神は案もあかも。彼石戸を内より内して。幽

居ませる。天照大御神を。八百万神とち此諸声小賞中をまし。  
笑ひ饒をふ様をきあし召され。おも宮比神の舞をより戯れ  
るふ俳優の面白く聞ゆるを。怪しく床しく思召さき自づ  
くらに。御怒りも和らきあひて。天石戸は細目小明け。御  
透見ありゆを。神とち遠に石戸をひき開け。その御手を  
とりて引出し奉り。り給て新まつくり置る。御宮に。遷座  
あり参らせしうは。世間あつひ照玉明るく。加は妖事し  
る悪神とも。ちまぐ這くの躰了てそ逃失り。爰も八百  
万神とち。大き悦ひあひて。面を見相せ。始めて明白に  
見えしうは。手を伸して歌ひ舞ひ。ともに覺え。あ。詠声

何れて。天晴ある面白し。あはれむ此し。何れさやけ。於計と唱へて。  
此は姫神のらき舞わざをき減衰さすべし。

天晴とは。日神もとの如く。石屋戸より出あへる。故に天の  
晴渡れる意あて。俗に何つむれ剛の者よ。何つむれ名人よ  
と褒むる。それあつはまきと云ふ詞は。此時は初め詞より  
始おまり。まゝ面白きを常闇に暗くましし世間の。まゝ明  
るく成れば故に。面の白くと見えある意は。やけと云ふは。  
分明の物の色目此分りて。意あての。とハ世間やみあて。  
心も伸やうあらま縮みまらむ。日神出御あらせらるる故に。  
縮みまらむ手足の伸やう小舞まらむ意あて。樂字をたけりみ

宅訓む。此も忍小依れ里。あゝ凡て神樂をはじめ諸藝小  
布免詞せり。事あるも。是より起れ里。○儲まらむ出を記  
とは。右の如くわざと可笑しく舞成どりあひ。故に。わざ  
をうしと云ひし言葉あるを。後小そ此詞をつめて。已は  
抜きせ云ひ。俳優の字をあて。此二字を。わざを記と訓  
む。此事はあはれ。神樂舞。あゝ猿樂能狂言をはじめ。何  
よらま舞をどり。芝居の狂言づく。まて抜。俳優といふ  
其もとは。まら宮比神也。此時のわざをきより。起れる故  
形るまら。古き書ともあも云る。如し。然れ。其より出る  
祭りの放免出しもの。難し。あゝ年れ始めの万歳を云ふ

戲舞あそびあそび俄狂言あはれ茶番狂言あはれと云ふ類たぐひい。或へて志まことやま舞あそび志まことやれ歌うた志まことやま踊あそびもいと古ふるく有ありしは是こゝより起たれるはと勿論もちろんの事ことあり。

乃すなはち此時このとき宮比神みやひのかみの諷うたひみせし。ひとみとみよ此御歌このみかみうたも歌うたといふ歌うた此始このはじめめめて。是こゝより以前いぜんの歌うたといふ物ものあはれ志まことや無なれむ古ふるの長歌ながうたまゝ三十一字さんじゅういちじの本歌ほんかを云いふよ及およぶを也なり。旋頭せんとう歌うた俳諧はいかい歌うた狂歌きやうか連歌れんか發句はつく地口ぢくち乃至いたするまで。凡たゞく言葉ことばに句くをなし。章あやを調しらへて吟うたむるもの皆みな是こゝより起たり。まゝ諷曲うたがひは類たぐひい神樂歌かみらうた催馬樂まげ今様いまじやうまゝ今いま此諷このうたを云いふよ及およぶは。長諷ながうたがひ端は誦うためりや也なり。淨留理節じやうりゆりせつも何なんも皆みなあはれより起たらざるハ無なきあり。

あや此餘このあやふも。巨細こゝろなりその名なを舉あげむよは。限かぎある多おほければ。今いまをその大略たいりやくを云いふあり。一言ひとことなり云いふにハ摺すりりて曲節まがせをつけて諷うたひ語る事こととも。一つもあはれ本縁ほんえんなり洩あはれる事ことを無なしと知しべし。

諸もろあそび右みぎの御歌みかみうた也なり。もろちとろづと云いふ。末すえの一句ひとく此意このい。股乳こちち宜よろしといふ。戲言あそびごとをと釋とく。此句このく此意このいを解とく。是は。戲笑あそびわら歌うたある志まことやを。知しむる由よしも此故このゆゑありと。上うへは三句さんくも殊ことなりやんまといふ無なき故ゆゑありて。天照大御神あまてらすみかみ。皇產靈大神みまうけのみかみのいとも大切たいせつ小形こがたしむい。是こゝよりなる。後のちは掃玉はらひたま饒速日命にぎはすひのみことと申まをすを。天降あまくだしむふ時とき。十種じゆしゆの神寶かみたまを賜たまひて。もし病やましき事ことありて。

此寶を振ひて。いとふとみよ。いつむもある。やさしくある。と唱へよ。然せむは。死人も生返らむと宣ひて。入躰より離れ遊る。魂神を鎮めとくむ。鎮魂祭の御法を傳へる。數千歳此法を傳へる。後神武天皇の御傳へ申せる。御世の壽命を保ちぬ。この御祭りを行ひぬ。宮比神の御裔の猿女君。うけ槽に上りあがりて。矛をもつて衝動くし。高らうに此御歌をとある事。あの時代由緒よある。古語拾遺。鎮魂の祭を天宇受賣命に遺迹あり。と有りて知べし。然れ此神も人の壽命を長延あらしめ。勿論あり。

抑お此御歌の句を。一二三四五六七八九十百万といふ。數の名とあるは。右の尊き由ありあるが故。世の人は。知らず。日くまあれを唱へしめて。身守りとあり。あしあし神慮。是れ此を唱へしむ。死人も生返らむと教へる。わどの大切なる事。數の名としめ。深く心をひそめて考ふれば。朝おきて。今日。後日といふを。始め。何し付ても。數を云さる。日を無記を以て。知られり。志ぐる。世間の人とも。大凡は古の道。故知らぬ。我が身に本。あな神を。むきて。他國の道を。信し。神に。御惠。故。知ざるは。悲し。事あり。心有らむ。人く。天津神とせ。

右に御言を思ひて。常は唱へむ由もか。其をまはれ御歌も。  
善神とちの御前小申せば倍くは利益をこまひ悪神は  
心とみて災難をばさき。実く幸福を招き災禍を消し壽  
命を延る神歌をまはれり。其の由緒小まきて朝廷に御  
守護と祝ひあへる。八神殿とおを中へも此に御入  
らせぬ。造酒司と申はるも。此神成つて祭らせぬ。ふ  
ことあり。此を唱へむは。ひきあふとみよいつむ也  
あ。やあ。此多里も。ちよろづとあしうに六言四句  
唱ふべし。或をやあ。此ありまごめても宜し。あ。此らの  
事小付ては書おち。き事とも多り。是と。今はその何ら

おしを云ふあり。  
あ。天照大御神。まてふ岩屋戸を出御ありし。新宮に遷  
座。奉りて宮比神。その御前小さむらひて。よくその御心を  
とり申し。あ。くさめ奉りて。善き神。こまは。益くふ。よく仕へ  
申さ。く。悪き神。入來らむと。ま。る。追。ち。り。を。け。荒。ぶ。る。神  
を。は。能。く。あ。せ。り。云。ひ。宥。め。て。心。を。直。さ。せ。御。伽。ま。を。し。つ。  
御側の事とも執まらぬ。ひ。あ。ひ。故。小。大。宮。比。咩。命。とも。大  
宮。能。賣。命。とも。申。せ。り。その。宮。仕。し。る。い。し。御。有。様。を。古。語。拾  
遺。小。今。世。に。内。侍。と。ち。れ。善。言。美。詞。を。も。つ。て。君。臣。の。間。を。和。し  
宸。襟。を。悦。懌。め。奉。る。々。如。し。と。あ。り。

内侍をふるくうちつみさむらひと訓せしめり。言は意は。内比御侍と云こせりて内裡侍ひて。御側の事とを勤むるましの名あり。世子まむらひと云へも腰子兩刀帯。武士を此み云ふまると心得居れども実小ハ男女を別と云宮仕へ成りし主小侍ひてその御用を勤むる人成。ひろく云ふ詞あり。是故女蔵人とも成諸侍と云ことも有王借まて世は内侍と此みいひく女官は一役を思へとも差別ある事なり。そは職員令あり。職原抄ありといふ書物。内侍司といふ女官の御役所。尚侍二人典侍四人掌侍四人とありて。それ位階つとめ方より高下あるを摺し

て内侍といひ。其中小第一比内侍を尙當内侍としり。今世小長橋の局と申は是あり。あまの摺じて婦人の任官して宮仕ひを流を宮人といひ。内侍といひ。宮人といふ号を天照大御神。天岩屋戸出御あり。大宮能賣命。それ御側小侍ひみへるより始あると。故実家の書とも云ふ。如し。但しこれを大内此みあらむ。其より次く大名小名あちの家くも。御局中老御側形ど。あま某比役目ありて。其勤め方も大く同じ趣きあり。然れば延喜式比八卷めり。朝廷あり。毎年六月と十二月。神今食の御祭。あま十一月。新嘗祭の御神事。あま日。大殿

祭とそ。内裡を言壽ぎ。祝ひある御祭ある時。うららむを殊  
更ふ。此神於祭らせある祝詞有り。その御詞小。大宮能賣命  
と御名を申事。天子の御同殿におはしまして。参入罷  
出る人の善悪を選び知して。悪神は荒ぶる態を和し静ん  
内裡小仕へ奉る男女は官人等。手躰は足躰は有しめむ。  
あゝ已が飛くあらまめむ。邪意穢心なく。宮進め小進免。宮  
勤ふ勤めて。咎過在らむをば見直し聞直し坐て。平ららく  
安ららく仕奉らしめあふ依りて。大宮能賣命と御名を  
稱へ申し奉るとやうに見えたり。  
此ハもと謂ゆる宣命がきあて。万葉がねを交へて書くる哉。

今も人に見易うらむ状。おとはを略してかくハ記せ玉。  
是を以て古き御世は。高き卑しき男女故いはむ。宮仕へ  
も人ぬり。年ごま此正月と。十二月と此初午の日。  
諸家あて宮咩祭玉と。風雅やう此神を祭れるま。古書  
どもよまれうを見えて。拾芥抄といふ物。その祭文を載ら  
ま。其文をなほご可笑みあり。戯るる詞を依は。此神  
元も宮比の御神徳ある故。それ御心合せて御蔭を  
蒙らむと此意なり。あゝ伊勢内宮の建久年中行事といふ  
古書。大神宮比御神事。仕へ奉る始め。男女の神官とち。  
何れもまづ此神を祭りて。大神宮比神事を平穩に障るま。と

無く勤めし免あへんと祈り申せこと見えたり。されば此らの  
由緒を尋ねて。男女を云は。宮仕へする人々は。大切なる御  
奉公のをりは云ふ。及ばぬ。日く小主は御前不出る時あると。  
おれ御神ふ祈念おをして出べく。おの職業家業。人比愛  
敬あらむ事哉。思をむ人を。常は此神の御霊を。幸ひみむ  
事を念じ申せべき事あり。

おのれ常ふ。世は宮仕へする男女は人々。おの歌舞および  
音曲は道をもつて業とあり。愛敬を求むる人あちの。此  
ひ免神の御神徳。志らぬ。更おその道は縁なき。故信仰  
まら。が氣は毒さ。いり。で此神は御功德を世に告知し

めむと。それ拜みの仕方。おの御祭り。式をも。下出して  
傳ふる事あり。

は。此ひめ神を。おの宮比神とも申し奉る。それ宮比といふ  
言葉の。あ。ろは。宮人の始めある。宮比神の風。なる。故。お。宮  
人。よりと云ふ。語をつ。お。て。み。や。ひ。を。云。へ。る。あり。そ。は。鄙  
ゆ。を。鄙。ひ。を。云。ひ。里。より。を。里。い。と。云。ふ。り。同。じ。く。其。方。を  
い。ふ。を。あ。を。ち。振。字。ま。あ。風。字。の。あ。く。ろ。なる。

惣して。世に。何風。何ありと云。こを。み。あ。是。お。お。れ。じ。そ。は  
男。お。は。男。の。風。あ。り。女。お。は。女。の。風。何。り。貴。人。より。貴。人。の。風  
何。り。賤。き。者。お。も。あ。る。某。く。相。應。は。風。あ。く。て。え。叶。は。ぬ。事

ある故に伊勢流小笠原流あどいふ家めては躰方とて  
其と重なりを教へよ、芝居狂言あせもも振付中其  
役わり相應のと重なりし神祇釋教恋無常此所作小つき  
喜怒哀樂此情あゆめての儀勢をも教ふる事あるが其本を  
こゝ此いめ神のと重なり躰より出さぬこと取重  
けて其みやむれ趣を男女よらむ常のも此言さす云よ  
及むを立ふる舞ふ自うらう威儀有りて優美ふう成をしく  
立居おつけて手此鹿相足の鹿相ある事なく見る人ことよ  
愛敬いささしい懐き主親をいふ及むを凡て貴人侍い  
ては能く常の御心をさしくみて事をとくたへ或をおが

下おとつ朋輩あど鹿相何やあち有るときは密お心をつけて  
人不知しめむもし上の御機嫌をそよ糸とる人何らよく  
御前を執あし申してそれ御きりんの直るべく実の心を  
あつと和し参らせ且ぎの仕ふ流人此上を恨み奉るよよく  
其事と取く和免論してまもく奉公小誠あらしめ人此善  
事は空毛小喜びそれ悪事はともよ憂ひて頼もしく或を  
上り御物思ひのあゆ時などは物にまそく事あをそらえて  
自然よそ此御憂ひの止べく御をあしおと申しあす時は  
より事あありては綺語をも交へて慰めあぬらせはあ上を  
守り奉る心をかけ強悍猛固あして其をおもて頭はさる

御側ちかく参るはじき者あと忍びて近らむとま家も  
おひ退をけまゝ何さおの化物不敵者も面がち向ひて  
恐る事あくあやし顕しあゝ然はべき時子當りて八人の  
恥てえをまじき狂言を毛憚らむ物して並ある人を  
とよもし笑はせ親子夫婦兄弟朋友の中らひも睦あしく  
和やりぬるが眞のみやびは非凡うて大宮能賣命はその  
趣ある御神徳は奇妙なまぐれあへる故うあゝみやびは神  
とも申せりそは上小記せる此神の神世小なりし御功績は  
さほりて知るべし。上の論はまゝに人々も入るる人々も  
然るを俗は和學者とらば眞はみやびの趣きを知らむ。

万葉集小みやびをと云ふ遊士とうき伊勢物語小かの  
おめ男が狩り往る時ふうるはしき女を見て狩衣は  
袖をきりて歌をかきて贈れ依事をむう一人はかくいち  
速記こやびはあむ為る。と有るあゝひ引出であゝハ  
後の書どもふ。風流閑雅なぞの字をみやびを訓あるあ  
どを引て宮比といふ言葉はこゝろ説くあれど宮比神は  
ほことれ宮風を夢みも知らぬ心不実形く勇みなく心  
小ありつゝ表べをかざる。優艶の容貌づもりて宮仕へ  
もせぬ凡俗の女子か。かの更科日記にはやく云ひおける  
如く。浮舟夕負などれ眞似を形し。雲客あゝ能優の人あ

ら惣常のむくつらき髻男が光源氏の氣どりふ。いやみ  
ある声つうい。扇子をつうい。煙管吹とる。も氣色はこ。  
月おううれ花よまに。実あき腰をれあど詠ちらし。それを  
好色の媒とちて。かのみめ男のごとく。人れつらぢの崩き成  
伺ふ類ひれ態をみやびれ本意も思へるは。いとも淺まし  
き事ありうし。今俗聞あそ。歌人よ物語家よと云る。人こ。  
多くを此つれの人ともあり。夢くちる輩の志とさを眞れ  
宮風と思ふ。履くらむ。

然れをいふも。宮比神の御有趣を志す。い奉りて男子ハ  
その女おちくらむ。出まき。家事あ。いやみ無く。女子は利

口を鼻ふうけむ。女をちけむ。万づり。下まで内を形る  
中。実意と滑稽とをう。終て。常。此神を信仰し奉るべき  
あり。古語も。男を賢愚となく。朝。立ちて。謗られ。女を美  
悪と形く。宮。小在。至て。妬ある。と云へ。協をげ。然る事。小て。  
此神の守護あ。きは。思をぬ。無実の。讒言あ。どうくる事。有り。  
藤原実方朝臣。此歌。子。天。う。お。昔。笠。開。此神の。形。う。り。せ。は。舊  
おし。中を。い。う。て。問。は。お。し。と。詠。る。笠。開。此神と。を。あ。の。比。賣  
神の。御。事。あ。て。此神の。御。守。り。に。依。り。て。舊。く。む。つ。び。し。中。此  
絶。さ。る。哉。あ。い。睡。ま。し。く。問。あ。ふ。べ。く。中。を。お。ち。ま。由。あり。然  
れを。朝。起。る。より。夜。寐。る。あ。で。人。小。つ。き。合。ひ。諸。用。を。辨。せ。依。

何うら何まで愛敬なく人づきあくては成就せざるを此  
神を信ずる時をその中をと聖持て和合せしめぬ御守  
護有り然れば縁結ひ和合の神と申さむも強言のあらま  
凡て去の愛敬とりふも性れ付たる目鼻ごちの器量の  
よし悪はみよ非をかの見目よりとり小團子れおとく丸く  
角あくむつくりと志する中実情のうまみ有り何まつけ  
ても憎氣なく強みもあるおどけも交りてと去と無く笑を  
ふくみ身のとめ回しきりて我を貞ならま様子れ  
よきが愛敬なり世には容貌も相應ふて心とて悪ら  
縁と何となく頼ふくくと人嫌はる人ほるものあり

ちやう此人よく信仰あらむ忽ちその御恵み有り況て  
元より愛敬のらん人れ祈り申せば諺よの鬼ふるを棒  
ふしき小七寶をかぎとる如き愛敬を賜ふ事あり  
但しあまは御奉公人宮仕する人のみあらま諸藝能を  
業と形する人などその藝小身を入れて実り上手あるも  
人の用ひれ悪き有り諸商賣は家とて所柄もよく  
品物も宜しけれと繁昌せぬ有り此もみあ此は先神の  
御守りふもれて愛敬あき故なり然れ貴賤老若男女を  
いを愛誠のみやび愛敬を得て主親の心より好む博く  
他人れ愛敬をも得まわしく思ふは上の記せる事

どもを能く思ひて。其上より其の御神に御有様。似むこ  
少城祈に申さば。それさるる響きの声。小應さるる。おとく  
著明りる。然れど世に生れり。一人も多き。是は。  
吾は。いま始めて。あそ。此神の事を聞かれ。昨日まで御名を  
ふよ。知ざれど。人の具員を受とまは。今更の信仰。よ及む。  
那と云ふも有べし。されど。そを我慢心とて。遂に人  
愛相つくる。本ある。其にけを。神の恵み。をいせ。大きある。物  
ふ。あて。人の生れ。那ぐらに。愛相あぶる。許りあるも。実には  
其人。然るべき縁ありて。此神に始め。あひ。道。を以て  
勤めとあし。業とさる。故に。人こそ知らぬ。幽。おその御恵み

ある故あり。然るを其人の。あはる。事と。六知らて。我。持。あへの  
徳のおとく。心得て。信心に。行。あ。きた。遂に。神に。御。あ。く  
し。み。受。て。後。は。人。に。用。ひ。は。ら。う。考。く。あり。行。く。物。那。に。  
此事古今の世人。おひろく。當て。考へ。見。る。小。違。ふ。こと。あ。し。  
下。さ。あ。り。て。愛。敬。を。要。と。さ。る。家。業。の。者。那。と。は。じ。え。人。に  
具員を得。と。か。後。に。用。ひ。ら。れ。を。成。む。く。う。ち。あ。き。は。天。死  
あ。ど。し。て。其。志。さ。し。を。果。さ。さ。る。者。お。あ。き。ハ。皆。其。の。故。那。り。  
和漢の。わ。り。し。を。云。む。漢の。文。帝。小。寵。愛。せ。ら。れ。て。類。あ。く  
榮。耀。ま。は。め。一。鄧。通。と。い。ふ。美。男。が。あ。ち。う。餓。死。せ。る。か。の  
小野小町。が。盛。運。の。時。も。あ。て。難。さ。れ。一。有。さ。ま。の。類。無。り

しも後には頼む方なき獨人とありて人よとまき。前  
地下の人とて賤めこぼし。文屋康秀の「俺ぬれ身をう  
草は根をふえそ。誘ふ水何らば往んとぞ思ふ」と詠し  
此人も捨られて。遂は野山まで死けるも。諸書小見え  
るもその諸人小愛敬あましを。我が器量とはみ思へる  
慢心もある。これ御神の御恵み。或賜を密かく成てし  
あり。然れども人よとまき。此道理を思ひて。行住坐臥まつきて  
實のみやびの心を忘れぬ。此神は信仰せむは立身出世の  
御守とあると無らむ。撫じて信心と云ふも。神の祈るむ  
を云ふも非む。能そのわざふ実をつくして。其及を

所をよく及ぶし守りあゆべ。祈り申まが信心あり。世の  
諺小笑ふ門には福きくると云ひて。人相のよきを褒め。  
おうえれ面といふ物を。まゝお多福ともいひく。諸人此  
愛敬をのぞむ家。小祝ふこやそ。或説小足利の末頃とろ。  
ある神社は巫子と亀女とて。その見目はこれ面のまどく  
あ流が。宇受賣命を信仰し。愛敬こわる。計りて見物此  
山をあるのみあらむ。見目ともまも心の実ありて。何ある  
流つら悪玉も。これ亀女が貞をみしやと。其悪心のやみ  
し故。其うねを面小つくり。お多福と名づけて弘め。一  
始めありと云ひ。お一説は直小宇受賣命は御うね。

擬へざる物ありとも云ふ也。何きりほあとの説ありむ。  
後よりよく考へる定むべし。然れど何れ小しても此御神此  
功德を放れ也。然まはあのお多福を祝ふ心を種として。  
宮仕への方より御奉公此人。謠舞狂言白拍子遊女小至  
るまで。惣じて愛敬あるては。叶を忠事と思はん人々男  
女小より也。此神を信仰せんは中肝要を至穴かしあ。

此神の御奉公の儀は、  
神前小向ひ座して平手を二つ拍ち其さま何の  
事もなく貴人より御辞儀を専ら如く拜し奉りて左に詞を  
白まへし俗の神道學者あど平人を謂ゆる神拜式の傳  
を受されを神に納受りきおとく云ふは妄談なり聽入  
る事あり也。

附録

右の如く宮比神を信仰し奉るは常小拜しよてある  
時不申事詞哉士つら也を有へうら也。是によりて其詞を  
あつ小記して普ねく男女の人々知らしむ。そはあづ  
朝ごとに神前小向ひ座して平手を二つ拍ち其さま何の  
事もなく貴人より御辞儀を専ら如く拜し奉りて左に詞を  
白まへし俗の神道學者あど平人を謂ゆる神拜式の傳  
を受されを神に納受りきおとく云ふは妄談なり聽入  
る事あり也。

天宇受賣命亦御名大宮能賣命亦御名宮比神乃御前尔慎

美敬比主親乃心尔令違受過事無久家内平穩尔朋輩親族  
睦志久夜守日守尔宮比乃御靈乎幸幣給比立壽命長久身  
乎立立名遠毛揚志米給閉止畏美畏美毛拜美奉留

かく白し畢りて頭をあげ。あゝ手を二つ拍て拜する。おと  
右小云あが如し。此上り心静ふさはるあき時をかの。ひを  
あゝみよの神歌を後るん。ても數あわく唱ふ。あし。  
あゝ今御奉公小出る。家業は出るといふ。急ぎは時。は  
略して宮比乃御神宮比乃御靈乎幸幣給閉と申して出  
て。歸り來ては。御蔭ふよりて。障りなく勤め歸れる由を  
御禮申し奉るべし。是をうへに申しと云ふ。俗は拜む

と云へは。念珠をもみ。合掌して向ふ。あやむ。心得る人  
多うまど。それを佛前小向ふ時の礼。小ころ有れ。皇朝の  
正しき御書物。小は神前まで。合掌する。礼式をあきあ  
あり。偕あゝ。經行は女は。神前の間。敷居をとら。もし同  
じ間あらは。常は正面より少しとわく。少しよあ。あ方  
寄りて。一寸御礼のみして。在るし。あま。遙拜とて。遙小拜  
む心はへ形。五。

○偕あゝ。上小記せ。依如く。古へ正月と十二月との初午は  
日。宮。咩祭を執行へる。小效ひて。此祭を行をむ。思ふ  
人へのあめり。是のその略式を記して。教へ知しむ。そは

此兩月も事多くいそがしき月あるを。初午小うぎら夜。  
 二の午三は午。まゝ其餘の日も。差支お祀吉日を擇  
 ひて。祭るべし。人さうち寄置自身は。事終る。床に間敷  
 清く掃除して。机をあやし。其上。菅薦り眞薦を敷くは  
 本式なきと。清き毛氈も敷ても敷く。其左右。花斗小柵に  
 ちでと麻を。窓の如くつけ並べ。時の花を交へあるも  
 宜し。而て其間。香焚くとき。不浄をよけて御神像を掛へし。  
 其御像も古書とも。小委しく考へ。極彩色小図せると。石  
 摺小志も。像も。兩様の掛軸。望みの人。進むる事あり。  
 六へ供物此品。合。向。御神像。

- 一 赤絹白絹 正絹も及み。三尺をくり。まても。巻く紙。小つみ。水いきをもちて結ぶべし。
- 一 結綿 絹。木綿。三品あり。けこと。よろし。つみ。包。水引をうけ。
- 一 御飯 高坏小も。
- 一 御酒 上品の清さけ。とくめ。
- 一 甘酒 堅き。あく。茶碗。盛り。
- 一 橘実 高坏。
- 一 備餅 生。ても。塩。も。
- 一 鯛魚 上。り。同じ。
- 一 鱒魚 上。り。あ。じ。
- 一 鯛魚 上。り。あ。じ。
- 一 臺 三。方。八。寸。何。れ。か。て。も。
- 一 臺
- 一 臺
- 一 對 臺。の。せ。
- 一 對 臺。の。せ。
- 一 臺
- 一 臺
- 一 臺



一 鮑貝 其あつ貝ともう

一 五玉

一 蠮貝 そのまゝ貝ともみ  
むきくてもよまし

一 毛ゆ

一 薺菜 小はあと八あふふのことあり一握布とす  
三把布とまきを切りて、じくらあぐ結ぶ

一 毛り

右何れも皿り好き土器す。笹葉あとも南天の葉あても  
ちきまて盛くるを臺小のせ。圖比如く置あらべて献る。これ  
定例の供物あり。但し鯛以下六一卵も。大きある平鉢一  
つ小盛さらむも宜し。此外ふも甜きもの珍し。祀物に献り  
多く思ふ物あらば。随分り供へ奉るべし。但し目那太とも  
赤目とも云ふ魚と海鼠を神小あてまつら。惣古法あり  
此を神世小故ある事あり。

○右の如く神前の供物畢りて後。常はあどく拜みを  
して。此御まつり。此時ふ申し上る祝詞あり。尤これハその  
祭り主のよむ事あり。もし差支へあらば。餘人ふよま。其も  
苦しうら。然れと。その讀む間。を自分の申し上る心もち  
小謹みて在るべし。其祝詞左のおとし。

八十月日波有礼。杼母今日乃生日能足日乎。吉日止擇比定  
米豆。是乃小麻乎。掃比清米豆。奥山乃賢木能枝乎。打折持來  
豆。時能花乎。毛取加豆。神籬那須二所。尔差立豆。掛卷毛畏伎  
宮比乃御神止。稱辞竟奉留。天宇受賣命亦御名。大宮能咩命  
能御靈乎。招奉里豆。古昔乃例乃任尔。種々乃多米。御物等備

奉里<sup>ほうり</sup>里<sup>り</sup>畏<sup>おそ</sup>美<sup>み</sup>畏<sup>おそ</sup>美<sup>み</sup>毛<sup>もう</sup>申<sup>まを</sup>佐<sup>さ</sup>久<sup>く</sup>絹<sup>きぬ</sup>波<sup>な</sup>編<sup>あむ</sup>作<sup>り</sup>綿<sup>わた</sup>波<sup>な</sup>結<sup>むす</sup>作<sup>り</sup>進<sup>すす</sup>物<sup>もの</sup>波<sup>な</sup>高<sup>たか</sup>坏<sup>わい</sup>  
能<sup>の</sup>弥<sup>や</sup>高<sup>たか</sup>尔<sup>に</sup>飯<sup>いひ</sup>乃<sup>の</sup>堅<sup>かた</sup>盛<sup>せ</sup>仁<sup>に</sup>清<sup>せい</sup>酒<sup>しゆ</sup>能<sup>の</sup>速<sup>すみ</sup>仁<sup>に</sup>堅<sup>かた</sup>酒<sup>しゆ</sup>乃<sup>の</sup>堅<sup>かた</sup>又<sup>また</sup>楯<sup>たて</sup>能<sup>の</sup>忽<sup>たち</sup>尔<sup>に</sup>餅<sup>もち</sup>  
乃<sup>の</sup>持<sup>もち</sup>榮<sup>えい</sup>仁<sup>に</sup>鯛<sup>たい</sup>魚<sup>ぎよ</sup>能<sup>の</sup>平<sup>へい</sup>仁<sup>に</sup>鱒<sup>ます</sup>魚<sup>ぎよ</sup>乃<sup>の</sup>益<sup>えき</sup>仁<sup>に</sup>鯛<sup>たい</sup>能<sup>の</sup>好<sup>この</sup>仁<sup>に</sup>鮑<sup>あわ</sup>貝<sup>がひ</sup>乃<sup>の</sup>片<sup>ぺん</sup>  
岡<sup>おか</sup>尔<sup>に</sup>蠟<sup>ろう</sup>貝<sup>がひ</sup>能<sup>の</sup>播<sup>は</sup>寄<sup>よ</sup>豆<sup>まめ</sup>薺<sup>なづな</sup>乃<sup>の</sup>庭<sup>にわ</sup>去<sup>さ</sup>受<sup>う</sup>御<sup>ご</sup>祭<sup>まつり</sup>仕<sup>つか</sup>奉<sup>ほう</sup>留<sup>りゆう</sup>乎<sup>こ</sup>嚴<sup>げん</sup>志<sup>し</sup>又<sup>また</sup>聞<sup>き</sup>食<sup>く</sup>  
志<sup>し</sup>受<sup>う</sup>納<sup>な</sup>米<sup>まい</sup>給<sup>たま</sup>豆<sup>まめ</sup>壽<sup>じゆ</sup>命<sup>めい</sup>長<sup>なが</sup>又<sup>また</sup>身<sup>み</sup>尔<sup>に</sup>恙<sup>や</sup>無<sup>な</sup>又<sup>また</sup>天<sup>あま</sup>地<sup>つち</sup>乃<sup>の</sup>不<sup>ふ</sup>祥<sup>しやう</sup>有<sup>あ</sup>斯<sup>この</sup>米<sup>まい</sup>受<sup>う</sup>  
内<sup>うち</sup>外<sup>そと</sup>能<sup>の</sup>惡<sup>あく</sup>事<sup>こと</sup>未<sup>な</sup>萌<sup>も</sup>前<sup>まへ</sup>尔<sup>に</sup>遠<sup>とほ</sup>文<sup>ぶん</sup>拂<sup>はら</sup>比<sup>ひ</sup>退<sup>たい</sup>介<sup>け</sup>給<sup>たま</sup>豆<sup>まめ</sup>常<sup>じやう</sup>尔<sup>に</sup>仕<sup>つか</sup>奉<sup>ほう</sup>留<sup>りゆう</sup>神<sup>かみ</sup>等<sup>ら</sup>  
乃<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>心<sup>こころ</sup>主<sup>しゆ</sup>親<sup>おや</sup>能<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>心<sup>こころ</sup>仁<sup>に</sup>令<sup>しん</sup>違<sup>ちが</sup>受<sup>う</sup>衆<sup>しゆ</sup>人<sup>にん</sup>能<sup>の</sup>愛<sup>あい</sup>敬<sup>けい</sup>布<sup>ふ</sup>風<sup>かぜ</sup>流<sup>りゆう</sup>乃<sup>の</sup>趣<sup>しゆ</sup>乎<sup>こ</sup>得<sup>え</sup>  
志<sup>し</sup>米<sup>まい</sup>給<sup>たま</sup>比<sup>ひ</sup>我<sup>われ</sup>爲<sup>な</sup>須<sup>す</sup>業<sup>ごう</sup>乎<sup>こ</sup>弥<sup>や</sup>進<sup>すす</sup>米<sup>まい</sup>尔<sup>に</sup>進<sup>すす</sup>米<sup>まい</sup>給<sup>たま</sup>比<sup>ひ</sup>願<sup>ねん</sup>布<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>等<sup>ら</sup>如<sup>ごと</sup>意<sup>い</sup>仁<sup>に</sup>  
叶<sup>あ</sup>志<sup>し</sup>米<sup>まい</sup>給<sup>たま</sup>比<sup>ひ</sup>集<sup>つ</sup>布<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>等<sup>ら</sup>睦<sup>むつ</sup>比<sup>ひ</sup>親<sup>おや</sup>美<sup>み</sup>萬<sup>ま</sup>世<sup>よ</sup>尔<sup>に</sup>繁<sup>は</sup>昌<sup>さか</sup>延<sup>のび</sup>豆<sup>まめ</sup>惠<sup>めぐ</sup>仁<sup>に</sup>良<sup>よ</sup>く  
尔<sup>に</sup>笑<sup>わら</sup>比<sup>ひ</sup>饒<sup>にぎ</sup>波<sup>は</sup>布<sup>ふ</sup>門<sup>かど</sup>止<sup>とど</sup>在<sup>あ</sup>志<sup>し</sup>米<sup>まい</sup>答<sup>こた</sup>過<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>遠<sup>とほ</sup>婆<sup>ば</sup>見<sup>み</sup>直<sup>ただ</sup>之<sup>の</sup>聞<sup>き</sup>直<sup>ただ</sup>之<sup>の</sup>坐<sup>ま</sup>豆<sup>まめ</sup>

夜<sup>よ</sup>乃<sup>の</sup>守<sup>まも</sup>日<sup>ひ</sup>乃<sup>の</sup>守<sup>まも</sup>仁<sup>に</sup>堅<sup>かた</sup>石<sup>いし</sup>尔<sup>に</sup>常<sup>じやう</sup>石<sup>いし</sup>尔<sup>に</sup>守<sup>まも</sup>幸<sup>さい</sup>開<sup>ひら</sup>給<sup>たま</sup>幣<sup>へい</sup>止<sup>とど</sup>鹿<sup>か</sup>自<sup>みづか</sup>物<sup>もの</sup>膝<sup>ひざ</sup>打<sup>う</sup>  
伏<sup>ふ</sup>世<sup>せ</sup>鶴<sup>つる</sup>自<sup>みづか</sup>物<sup>もの</sup>頂<sup>かみ</sup>根<sup>ね</sup>突<sup>つ</sup>拔<sup>は</sup>豆<sup>まめ</sup>恐<sup>おそ</sup>美<sup>み</sup>恐<sup>おそ</sup>美<sup>み</sup>毛<sup>もう</sup>白<sup>しろ</sup>須<sup>す</sup>

かく白<sup>しろ</sup>毛<sup>もう</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>祭<sup>まつり</sup>の<sup>の</sup>思<sup>おも</sup>し<sup>し</sup>拜<sup>まが</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>例<sup>れい</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>せ<sup>せ</sup>く<sup>く</sup>加<sup>か</sup>比<sup>ひ</sup>神<sup>かみ</sup>  
歌<sup>うた</sup>を<sup>を</sup>布<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>能<sup>の</sup>く<sup>く</sup>箴<sup>しん</sup>反<sup>はん</sup>又<sup>また</sup>も<sup>も</sup>唱<sup>とな</sup>へ<sup>へ</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>殊<sup>こと</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>不<sup>ふ</sup>願<sup>ねん</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>也<sup>や</sup>  
何<sup>なに</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>能<sup>の</sup>く<sup>く</sup>祈<sup>いの</sup>り<sup>り</sup>申<sup>まを</sup>して<sup>して</sup>傍<sup>かた</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>そ<sup>そ</sup>記<sup>し</sup>是<sup>こゝ</sup>も<sup>も</sup>重<sup>おも</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>祭<sup>まつり</sup>乎<sup>こ</sup>不<sup>ふ</sup>  
集<sup>あつ</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>拜<sup>まが</sup>む<sup>む</sup>所<sup>ところ</sup>也<sup>や</sup>と<sup>と</sup>常<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>也<sup>や</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>斯<sup>かく</sup>て<sup>て</sup>酒<sup>しゆ</sup>  
宴<sup>えん</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>免<sup>めん</sup>暫<sup>しばらく</sup>く<sup>く</sup>何<sup>なに</sup>り<sup>り</sup>そ<sup>そ</sup>神<sup>かみ</sup>酒<sup>しゆ</sup>を<sup>を</sup>下<sup>くだ</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>歌<sup>うた</sup>舞<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>  
凡<sup>まづ</sup>て<sup>て</sup>音<sup>おん</sup>曲<sup>きよく</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>俄<sup>かた</sup>狂<sup>きやう</sup>言<sup>げん</sup>茶<sup>ちや</sup>番<sup>ばん</sup>を<sup>を</sup>也<sup>や</sup>何<sup>なに</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>宮<sup>みや</sup>比<sup>ひ</sup>  
や<sup>や</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>睦<sup>むつ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>機<sup>は</sup>嫌<sup>けん</sup>よく<sup>よく</sup>戯<sup>あそ</sup>れ<sup>れ</sup>遊<sup>あそ</sup>び<sup>び</sup>て<sup>て</sup>神<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>免<sup>めん</sup>勇<sup>ゆう</sup>め<sup>め</sup>  
奉<sup>ほう</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>是<sup>こゝ</sup>を<sup>を</sup>直<sup>ただ</sup>會<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>何<sup>なに</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>去<sup>さ</sup>比<sup>ひ</sup>御<sup>ご</sup>祭<sup>まつり</sup>の<sup>の</sup>

時<sup>とき</sup>亦<sup>も</sup>或<sup>ある</sup>も腹<sup>はら</sup>立ち<sup>た</sup>。何<sup>なに</sup>る<sup>も</sup>ひは人<sup>ひと</sup>のあめ善<sup>よ</sup>く<sup>ら</sup>ぬ事<sup>こと</sup>ねとせん  
人<sup>ひと</sup>は。か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>願<sup>ねが</sup>望<sup>ぼう</sup>叶<sup>は</sup>を<sup>を</sup>き<sup>き</sup>らん<sup>ん</sup>慎<sup>しん</sup>む<sup>む</sup>べし<sup>し</sup>畏<sup>おそ</sup>む<sup>む</sup>を<sup>を</sup>し。

右宮比神此御神德。世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>季<sup>き</sup>く<sup>く</sup>知<sup>ち</sup>辨<sup>べん</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>憤<sup>ふん</sup>ろ  
しく<sup>しく</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>目<sup>め</sup>易<sup>い</sup>く<sup>く</sup>平<sup>へい</sup>假<sup>が</sup>名<sup>な</sup>小<sup>せう</sup>志<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。一<sup>一</sup>。扱<sup>あ</sup>小<sup>せう</sup>彫<sup>てい</sup>て<sup>て</sup>師<sup>し</sup>比<sup>ひ</sup>文<sup>ぶん</sup>庫<sup>く</sup>を<sup>を</sup>  
を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>免<sup>めん</sup>進<sup>しん</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>て。世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>普<sup>ふ</sup>徧<sup>べん</sup>く<sup>く</sup>傳<sup>でん</sup>ふ<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>成<sup>せい</sup>小<sup>せう</sup>あり。  
其<sup>その</sup>も<sup>も</sup>同<sup>どう</sup>じ<sup>じ</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>勧<sup>すす</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>是<sup>こゝ</sup>は<sup>は</sup>あり。

文政十二年己丑七月

源阿弥法王記序

不評翻歎並説

伊吹迺屋先生及門人著述刻成止書目

塾藏版

○古史成文 神代部

三卷 ○古史微

神代部六冊  
開題記五冊

十一卷

○古史傳 自  
至十六卷

四帙 ○古史本辭經 五十冊  
義訣

四卷

○神代系圖 折本  
箱入 一帖

○同 小折本

一帖

○同 挂軸料

一枚

○靈能真柱 二卷

○神拜詞記 一帖

○至多須喜 二  
帙

十卷

○太元圖說 石摺 一幅

○古道學神号 同

一幅

○万聲大統譜

一幅

○弘仁歷運記考 二卷

○神字日文傳 二卷

○疑字篇 日文傳  
附錄

一卷

○皇國度制考 二卷

○祝詞正訓 二卷

○大祓詞正訓 折本

一帖

○天津祝詞考 一卷

○古道大意 講本

二卷

○靜乃石屋 同

二卷

○皇典文彙 三卷

○童蒙入學門 一卷

○入學門答

一卷

○牛頭天王曆神辨 一卷	○鑿宗仲景考 一卷	○古今妖俗考 三卷
○德行式 <small>石指</small> 一幅	○立言文 <small>同</small> 一幅	○赤縣歷代尺圖 一枚
○出定笑話 <small>講本 附錄</small> 二卷	○悟道辨 <small>同</small> 二卷	○伊吹於呂志 <small>同</small> 二卷
○宮比神御傳記 一卷	○天滿宮御傳記略 二卷	○木匠祖神号 <small>石指</small> 一幅
△神德畧述頌 一卷	△古道訓蒙頌 一卷	△叶古畧 一卷
○日女島考 一卷	○古學二千丈 一卷	○草木撰種錄 一枚
○鬼神新論 一卷	○俗神道辨 四卷	○撞木隨 一卷
○石指類 數種	○鑿祖神号 <small>石指</small> 一幅	○春秋命歷序考 二卷

先生の著書凡て百部巻數千巻に近し次々上木して同志を示しむと以  
但し百部の内子孫のみの傳遺さばく物なきは非也其の師家は就て問  
答志右全書自ら初其書等此大意字知むと思む人は別小記せし著述  
書目集と云物あり見く知し 門人 堀尾房守 今井秀清等誌

